

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：35406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380662

研究課題名(和文) ボランティア行為の定着および展開のための日加比較研究

研究課題名(英文) Comparative studies on Japan and Canada for establishing and developing volunteer acts

研究代表者

竹中 健 (Takenaka, Ken)

広島国際学院大学・情報文化学部・講師

研究者番号：60609080

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：日加両国ともにボランティア行為者による活動項目は多様化した。その一方で日本の病院や施設に90年代以降に設置されたボランティア組織のありかたには、今なおさまざまな問題と課題がある。とくに日本において国家・行政によるボランティア動員の矛盾のなかで、福祉・医療分野で活躍するボランティア組織及び行為者地位は、その社会的評価とは裏腹に現実には必ずしも高くない。カナダ・オンタリオ州ウインザー大学のMaria Giannotti氏とともに「医療と福祉のボランティア：病める人・死にゆく人と寄り添う人の社会学」としてワーキング・グループを形成し、孤独死を減らす看取りのボランティアの可能性を日加共同で押し進めた。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this research was to analyze why Japanese hospital volunteer groups were not utilized as much as they could be and why such services were not being expand as in Canada and America. Our research concluded that it was due to the government's lack of recognition of behavioral inefficiencies, contributing to the insufficient mobilization of volunteers into hospitals.

While the government was eager to place volunteers, the hospitals were not able to make full use of them. This gap of information between the government and the hospitals is likely to have been responsible for the failure to successfully mobilize hospital volunteers in Japan.

研究分野：社会学 社会福祉学

キーワード：病院ボランティア 終末期医療 医療ボランティア 福祉ボランティア ボランティア動員の失敗 日加比較 専門職とボランティア 看取りのボランティア

## 1. 研究開始当初の背景

公的部門がカバーできなくなりつつある様々な福祉領域において、民間部門や市民による取り組みが一部顕在化しつつある。はたして、市場原理のなかで動く企業や善意や余力に基づく市民によるボランティアな活動が、真に差し迫った状況のなかでサービスを必要としている人々にたいしてどこまで十分な福祉を提供できるのか。これまでの研究においては、公的セクター、民間セクターに対応する第三のセクターとして捉えられる市民によるボランティアセクターが展開していくプロセスを把握することにより、その存在意義と可能性を実証的な見地から見極めようと試みてきた。ボランティアの定義は「対話的行為を媒介にしておこなわれる、非営利かつ非職業的で自発的なアクション」(佐藤慶幸 1988)とし、「自発的な意志に基づいて自発的に社会活動を行う人」(工藤裕子 1995)とする。中野敏男(2001)は、現在日本のボランティア行為の多くは行政による動員であるとみなす。こうした視点に対して、本研究ではボランティア行為が行為者自らの内発的な必然的に導かれている可能性を探ってきた。その方法は、行為者のライフヒストリーに着目し、事例をつうじて行為者に個人的に蓄積された「活動経験」こそがボランティア行為を導きだしているというダイナミズムを示すことであった。申請者がこれまでに得た知見は、ボランティアを積極的におこなっている人々が長年にわたり数かずのボランティア経験を積む過程において、行為者には、なんらかの内的な必然性とその意味が読み取れるという事実であった。更なる研究上の問題点とは、一部の人が「ボランティア」という habitus (Bourdieu 1979=1989: 261)を強固に所持していたとき、その habitus を築きあげていくプロセスを明確な形で捉えていくためには、関連する規範が創出される過程をより克明に追う必要があると考えられる。

## 2. 研究の目的

公的社会福祉諸制度の代替となるしくみ創りを考えるうえで、本研究は Janoski ら(1998)の議論を次の二つの点で引き継ぐ。第一は、これまでのボランティア研究が暗黙のうちに前提としていたボランティア普及という政策的な意図を相対化して論考を進めるという点である。第二は、ボランティア行為の源泉が、Emile Durkheim の流れを汲む normativists たちの主張する「価値や社会規範の推移」あるいは「社会化」の結果にあるのか、それとも Pierre Bourdieu の habitus の概念に象徴されるような「活動経験」や「社会参加経験」の結果にあるのかを明らかにするという論点である。Janoski らは 17 年間という長期にわたって高校在学時以降のボ

ランティア行為者を追跡調査し、計量的な手法により分析した。貴重な研究でありその意義は大きい。彼らの用いた統計的手法のなかで見過ごされたものも一部ある。さらに行行為者の政治的志向性の測定方法およびその指標に若干の問題があること、それが日本における継続的ボランティア行為者へとどのように適用できるのか等、問題は残されている。また「規範」か「経験」かという答えも、いまだに明白には導かれていない。それらを明らかにする必要がある。

北米においては 70 年代に、日本においては 90 年代後半において、医療費を削減する目的およびマンパワー不足を解消するうえで都合のよい「安上がりの労働力」という期待のもとに、行政が主導するかたちでボランティアを動員してきた事実は、両国とも共通している。こうした視点で病院ボランティア定着過程の日本と北米との比較を行う。病院へのボランティア組織の導入は、日米両国とも社会的なニーズに込めるかたちで政策的に推し進められていったという事実は注目される。なぜならば、日米共に病院ボランティアが意図的に動員されたという事実は、日本においてのみ十分に病院ボランティアが展開していないことを、「動員されたため」と単純には説明できないからである。北米においては、ボランティアへの動員が一部おこなわれたのにもかかわらず、その後普及し展開をみせている。その一方で、日本においては、動員後の普及と展開には、多くの問題を抱えているという実態がある。両国の展開過程を比較することにより、日本においては一部の病院ボランティアが組織として定着しない理由は何かを把握する手がかりを得られる可能性がある。

医療・福祉分野への国家によるボランティア動員が与えた影響とその結果は、既存研究において今だにはっきりと示されてはいない。とくに医療・福祉分野のボランティア組織の活動に注目した際、それらは社会のなかで新たなサービスを生み出す力や新たなしくみを創りあげていく可能性はほんとうにあるのか、明らかにされる必要がある。ボランティア行為者が置かれた構造的課題に目をそむけることなく、行為者が共通して発信している「新たなシステム創り」という社会への直接的かつ積極的な働きかけと、国家または地方行政へむけた行為者たちの善意に満ちた強いメッセージを読み解いていくことが、本研究の含意である。これまでの多くのボランティア研究が理念的かつ楽観的理想論に終始するか、社会構造的矛盾から行為や仕組みそのものの限界を指摘するのみであった。本研究が発掘しようとしている知見とは、「どうすればボランティアによる新たな社会福祉の仕組みを創出できるようになるのか?」という問いに具体的に答えていくための発見である。一部のボランティア組織は、動員された当初の存在から次第に姿を変え、

より上位の組織によって与えられてきた役割遂行の内容も変化させていく事実は、注目される。ボランティア組織とその上位組織との関係性は、けっして固定的ではない。一握りのボランティア組織は、病院組織や国家の医療・福祉行政に影響をおよぼすだけの対抗的な規範を創出する能力と可能性を確かに有しているという事実も無視できない。本研究は、これらをとくに成功している北米の事例の中から読み取り、その成功の契機を国内のボランティア組織の中に確保するための知見を提供するものである。

### 3. 研究の方法

これまで14年間調査した東京・長野・北海道の病院ボランティア組織のデータに対応させるべく、2011年に開始した北米において最も先進的であるとされるカナダ・オンタリオ州における病院ボランティア組織の調査を引き続き追加して得られるデータにより、日本とカナダの比較をおこなう。カナダにおける調査は、2014年以降、毎年8月および3月の年2回の調査を計画している。これを3年間にわたって繰り返し実施し、これまでの日本国内のデータと対応させる。同時に、継続的ボランティア行為に誘導する日加の教育制度についても比較検討する。こちらについては、事例研究と同時に制度分析のための資料収集と教員および高校生・大学生からの聞き取りが中心となる。聞き取りに際しては、プライバシーへの倫理的配慮を行ったうえでボイスレコーダーに録音し、後に発言内容を原稿化したうえでテキストを分析する。

### 4. 研究成果

医療・福祉分野への国家によるボランティア動員が与えた影響とその結果は、既存研究において今もまだはっきりと示されていない。とくに医療・福祉分野のボランティア組織の活動に注目した際、それらは社会のなかで新たなサービスを生み出す力や新たなしくみを創りあげていく可能性はほんとうにあるのか、という問いから本研究はスタートした。明らかにされたことのひとつは、日加両国の病院ボランティアで活躍するボランティア行為者たちは、自分たちが置かれた構造的な問題に目をそむけることなく、制度化・硬直化した既存の医療制度や福祉制度のなかで、新たな発見や提案を積極的に行っているという事実であった。行為者が共通して発信しているとみなせることのひとつには、「新たなシステム創り」という社会への直接的かつ積極的な働きかけと深く結びついているケースが確かに存在していた。国家または地方行政へむけた行為者たちの善意に満ちた強いメッセージを読み解いていくことが、強く求められている。これは本研究がもたらすことのできる唯一の含意である。

これまでの多くのボランティア研究が理念的かつ楽観的理想論に終始するか、社会構造的矛盾から行為や仕組みそのものの限界を指摘するのみであった。本研究が発掘しようとしていた知見とは、「どうすればボランティアによる新たな社会福祉の仕組みを創出できるようになるのか？」という問いに具体的に答えていくための発見であった。一部のボランティア組織は、動員された当初の存在から次第に姿を変え、より上位の組織によって与えられてきた役割遂行の内容も変化させていく事実は、日加ともに注目される。ボランティア組織とその上位組織との関係性は、けっして固定的ではない。一握りのボランティア組織は、病院組織や国家の医療・福祉行政に影響をおよぼすだけの対抗的な規範を創出する能力と可能性を確かに有しているという事実も無視できない。これらをとくに成功している北米の事例の中から読み取り、その成功の契機を国内のボランティア組織の中に確保するための知見を参考として提供する。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Ken TAKENAKA, "Why Japan's Hospital Volunteer Program Has Failed: Civil Society or Mobilization?" Bulletin of Hiroshima Kokusai Gakuin University, 査読有, Vol.47, 2014, pp.1-10

竹中 健、書評リプライ「ボランティアへのまなざし - 病院ボランティア組織の展開可能性」、現代社会学研究、査読有、Vol.27、2014、pp.107-113

竹中 健、「ケアワークとボランティア ケアにかかわる領域はどのように専門職化するのか?」、広島国際学院大学研究報告、査読有、Vol.48、2015、pp.17-26

〔学会発表〕(計 10 件)

1. 竹中 健、「カナダにおけるピアサポートグループ 国家・行政からの自律と連帯」、東北大学、第40回日本保健医療社会学会大会、2014.5

2. 竹中 健、「出産のナラティブ カナダ・オンタリオ州における助産師ステーションの活動事例から」、札幌大谷大学、第62回北海道社会学会大会、2014.6

3. 竹中 健、「ジェンダーとナラティブ ナラティブからみる日本人男性性のジェンダー・バイアス」、日本女子大学、第62回関東社会学会大会、2014.6

4. Ken TAKENAKA, "How the Japanese Male Narratives Are Made up?" 査読有、the international conferencecenter Pacifico Yokohama , XVIII ISA WorldCongress of Sociology, 2014.7

Faculty of Nursing,  
Sessional Instructor

(4)研究協力者  
なし

5. Ken TAKENAKA, "Who Makes the Stories, Medical Professionals or Patients?" 査読有、the international conferencecenter Pacifico Yokohama , XVIII ISA World Congress of Sociology, 2014.7

6. 竹中 健、「病院ボランティアの日加比較」  
首都大学東京 荒川キャンパス、第 41 回日本  
保健医療社会学会大会、2016.6

7. 竹中 健、「ケアにかかわる領域はどのように  
に専門職化するのか？」早稲田大学、第 88  
回日本社会学会大会、2016.9

8. 竹中 健、「終末期医療のボランティア」  
上智大学、第 64 回関東社会学会大会、2017.6

9. 竹中 健、「医療と福祉のボランティア：  
病める人・死にゆく人と寄り添う人の社会学」九州大学、第 89 回日本社会学会大会、  
2017.10

10. Ken TAKENAKA, "Possibility of  
Developing Volunteers ' Activities in  
Medical System", 査読有, The 14th East  
Asian Sociologists Newt Conference  
(Chung-Ang University),2017.11

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

なし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

竹中 健 ( TAKENAKA, Ken )  
広島国際学院大学・情報文化学部  
現代社会学科 講師  
研究者番号：60609080

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

Maria Giannotti  
University of Windsor,